

人口減少が進む中で、「人が減ることで地域が荒れる」→「地域が荒れることでさらに人が減る」という負の連鎖が、特に中山間地域や過疎地域で顕著になっています。このような中、吉賀町職員労働組合が、ここ数年毎年取り組んでいる環境美化活動は、単なる清掃や整備にとどまらず、地域再生の出発点となる重要な意義を持つと思っています。

吉賀町職員労働組合が環境美化活動を通じて、人口減少にどう立ち向かうのか、具体的な効果と取り組みを整理します。

地域の環境美化活動を通じて人口減少社会に立ち向かう

— 小さな行動が地域を変える —

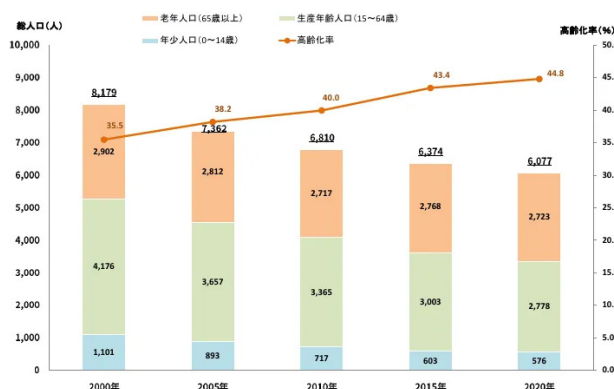
島根県本部／吉賀町職員労働組合 村上 詩織

1. はじめに

いま、私たちが直面している人口減少という現実、数字だけの問題ではありません。人が減れば地域のにぎわいが失われ、草が伸び、ごみが増え、誰にも気づかれずに風景が朽ちていきます。そんな変化が、私たちの暮らす地域で静かに進んでいます。

地域の衰退を嘆くだけではなにも始まりません。大きな制度改革や国の政策転換を待つだけでは、私たちのような小さな自治体は先に消えてしまいます。私たちにできることは小さくとも、自らの足もとから行動すること。それが地域の再生、人口減少に立ち向かう一歩となります。

私たち、吉賀町職員労働組合が近年取り組んでいる「環境美化活動」は、一見すると単なる清掃活動のようにも思えますが、もっとも身近で具体的な取り組みのひとつであり、そこには実は、人口減少社会に立ち向かうヒントがたくさん詰まっていて、問題解決の出発点になります。



図：2000年以降の3区分別人口の推移

出典：国勢調査（総務省統計局）

注：年齢不詳人口を各年代に按分後の数値を用いている。

2010年は、年齢不詳の人口を各年代へ按分していないため、年代別人口の合計と総人口の値が異なる。

2. 地域をあきらめないという意思表示

道路のごみ拾いや草刈り、花壇の整備など、そうした活動に組合員が自発的に関わることで「この地域を見捨てない」、「私たちはここで生きている」という強いメッセージを地域に届けることができます。

全国各地で空き家が増え、雑草が伸び、ごみが放置され、かつて地域を支えていた活気やつながりが失われつつあります。こうした変化に対して、ただ、「しかたがない」、「誰かが何とかしてくれるだろう」と見過ごせば地域の衰退はさらに加速します。私たち吉賀町職員労働組合が、いま、環境美化活動に力を入れているのは“それ”に対してあきらめないという意思で立ち向かうためです。

実際、役場の人が環境美化活動に取り組んでいる姿を見た住民から、「ありがとう。助かるよ。」、「いい取り組みだと思う。」などのうれしい声がかけられることもしばしばあり、それは、私たちが地域から信頼される“顔の見える存在”であるということだと実感もできます。特に高齢者の多い吉賀町では、職員が地域の風景に関わることで自体が安心感につながるのではないかと思います。



3. 地域へのまなざし、職員の意識づくり

自治を語るには、まず地域に足を運び、声を聞き、実際に手を動かす。それこそが、これからの時代に求められる公務員像であり、組合活動のあるべき姿でもあると思います。

吉賀町役場では、団塊の世代の退職などにより、ここ数年で職員数の約1/3にあたる30人以上の職員が入れ替わるという、過去に経験したことがない事態が起きています。職員の平均年齢は下がり、近年入職した職員の中には、町外出身者も多く在席しています。そういった若手や町外出身の職員が環境美化活動に自主的に関わることで、職員自身の地域へのまなざしにも変化があります。

環境美化活動を実施することで、自分たちのまちの現状「空き家の放置や道路の劣化、まちゆく人の高齢者の多さ」など、普段のデスクワーク業務だけでは関われない、地域のリアルな姿に触れることで、まちづくりへの視野が広がり、自分がどのように地域に関わっていけるのかを考えるようになります。

特に若い職員にとっては地域課題を体感し、まちをつくる一員としての実感、当事者意識を得るきっかけにもなります。それは公務員としての誇りを育てるかけがえのない体験だと思います。環境美化活動はこうした職員一人ひとりにとって、大きな気づきの機会にもなります。

今年の6月によしか病院周辺で環境美化活動を開催したところ、約40名の職員が参加してくれました。その中には多くの若手職員の姿もありました。活動を通して彼らも何かしらの気づきや、感じ

るものがあつたのではないかと思います。

組合活動が、自分たちの労働条件だけの話ではなく、地域、自分たちのまちをどうすればいいのか、の話へも広がっていき、職員一人ひとりの意識の変化が地域の持続可能性を支えるようになっていきます。



4. 共助の輪を広げる場に

現在は、吉賀町職員労働組合の自治研活動のひとつとして、組合員のみで環境美化活動を実施していますが、私たちのこの活動は、地域を巻き込んで広げることが可能なものだと思います。今後、自治会や学校、福祉団体などと一緒に活動を行えば、地域ぐるみの“共助の場”になりますし、子どもたちも参加してくれば、次世代の地域の“担い手の育成”にもつながります。また、地域と一緒に活動することで、住民の声を拾ういい機会にもなります。さらには、一緒に活動した住民が「このまちにはまだ希望がある」と感じ、他の地域活動を始めるきっかけになるかもしれません。

環境美化活動という環境を整えるというシンプルな行動・活動が、みんなでまちを守る意識へとつながり、地域の連携も生まれ、やがては地域全体の課題解決力を高めていくのではないかと思います。環境美化は、地域の“誰かがやる”から“みんなで一緒に守る”へ変わる第一歩なのです。

5. 小さな実践が、地域を動かす力になる

人口減少に正面から立ち向かうには、大きな予算や制度改革だけでは足りませんし、現実問題として町の予算も限られ、人員も不足する中、「何ができるか」ではなく「いま、何をするのか」が重要だと感じています。

地域の未来は、遠くの誰かが変えてくれるものではありません。地域を変えていくのは、結局のところ、そこに暮らす人々と、このまちに関わる私たち職員一人ひとりの小さな行動の積み重ねです。小さな行動の積み重ねが、確かに地域を動か



していくのです。環境美化という日常的で身近な行動が、その小さな積み重ねの出発点になります。

私たち吉賀町職員労働組合はこれからも地域に根ざし、地域とともに歩む労働組合として、できることから始めます。「草を刈る」、「ごみを拾う」、「花を植える」その一つひとつの手の中に、地域の未来があると信じて小さな行動を実践し続けていきます。

6. まとめ

ここ数年毎年取り組んでいる環境美化活動は、地域をきれいにするだけでなく、吉賀町職員労働組合が「地域に開かれた公共」として信頼を得て、住民とともに人口減少社会に立ち向かうための重要な実践手段です。「地域に必要とされる公務員像」とは、ただのサービス提供者ではなく、地域の中で動き、語り、つなぐ存在です。職員の自主的な活動は、「役場職員も地域の一員」という共感も生みやすいと思います。その出発点が、誰にでもできる「草刈り」や「ごみ拾い」であり、その小さな積み重ねが未来を変える力になると私たちは信じています。

自治研活動は、理論や制度だけを追う研究ではありません。現場に立ち、実践し、地域と対話することで、政策や自治の在り方を探る活動だと思います。だからこそ「小さな行動」が重要なのです。小さな行動を通じて、現場で課題に気づき、住民とつながり、仲間と共有し、それを提言につなげていく。その積み重ねが、「人口減少だから仕方がない」という諦めの空気を打ち破り、「この地域にはまだ希望がある」と実感できる空気を生み出していきます。

また、労働組合の役割は、職員の権利を守ることだけではありません。その働く環境そのものである地域社会を守り、育てることも自治体職員・公務員労働組合に求められる使命です。そのため、今後の組合活動は、単に内部の課題を解決するのではなく、地域社会そのものをどう守り、どう再生していくかという公共的な視点を持つことが不可欠です。環境美化活動という小さな行動は、その先陣の活動として私たちの手の中にあります。

これからも私たち吉賀町職員労働組合は、地域の課題と向き合いながら、組合員一人ひとりが地域の担い手として育ち、地域とともに歩み続けます。自治を支える一員として、そして、この地域を未来へとつなぐための当事者として。

「草を一本刈る」「ごみを一つ拾う」それだけで“まち”が大きく変わるわけではありません。けれども、誰かがそれを実践している地域は、「変えよう」「変わろう」としている地域だと住民は感じ取ってくれるはずです。その一歩を踏み出すのが、私たち吉賀町職員労働組合が実践しているこの“地域の環境美化活動”なのです。

